

令和6年度

## 一般入学試験

国語

時間：50分

満点：100点

### 受験についての注意

- 1 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。
- 2 問題用紙は11ページ、問題は一～三まであります。
- 3 解答に文字数の指定がある場合には、句読点を1字と数えるものとします。
- 4 「試験開始」の合図があったら、まず解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号バーコードのシールを指定の場所に貼ってください。
- 5 試験中、問題用紙の印刷が見えにくい、または文章等で不明な点がある場合は、手をあげて監督者に知らせてください。ただし、問題に関する質問には、いっさいお答えできません。
- 6 各問題とも、解答は解答用紙（別紙）の所定欄に記入してください。
- 7 「試験終了」の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、監督者の指示にしたがってください。
- 8 解答用紙だけ回収します。問題用紙は持ち帰ってください。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人にとってミイラは恐ろしいが、とても興味深い存在のようです。それが証拠に、ミイラ展というとエジプトのものでもインカのものでも、たくさんの入場者があるといいます。

① 私にとつてのミイラは、ただただ恐ろしい存在でした。だから、エジプトで発掘しはじめたときでも、ミイラだけは出てこないでくれと祈っていました。しかし、発掘二年目からミイラが出てしまい、形質人類学の専門家に来ていただかなくてはならなくなってしまった上に、ミイラを遺跡に放置しておく村人に盗られてしまうので、正規の収納<sup>A</sup>ソウコ<sup>B</sup>が決まるまで宿舎にもっているようにと考古庁事務所から言われてしまったのです。

当時の宿舎は、ツタンカーメン王墓発見で有名なハワード・カーターの建てた家、通称カーターハウスでした。とても狭くて、私たち学生のベッドルームのベッドの下に、そのミイラたちは新聞紙に包まれ、ベニヤ板の上にのせられ置かれたのです。そのため、夜な夜なミイラたちを追われたり、首をしめられている夢を見てしまう始末でした。

ともかく、ミイラ嫌いが直ったきっかけは、形質人類学の先生のひとりが語った、ミイラってとても大切なもので、少しも怖いものでも気味悪いものでもないという言葉からでした。

「ミイラ<sup>のろ</sup>の呪いなんてあるわけじゃないですか。ミイラって机や椅子と同じ物体ですよ。よしんばミイラの魂があったとしても、何千年も墓の中に放置され、かえりみられなかったり、盗人にぐちゃぐちゃにされたものをこうしていいねいにほこりを取り、ちぎれた腕や足をつけ、お棺に入れ直してもらった人を恨むはずはないですよ。恨むどころか、感謝してきつと私たちによりき運をくれますよ」

そのときから今日にいたるまで、私はミイラと出会うとそういうポイントでミイラと接し、言葉を交わしてきました。

ところで、日本人の多くはミイラってみんな同じものだと思っっているようです。ミイラには大きく分けて二つの種類があります。ひとつは自然ミイラで、もうひとつは人工ミイラです。前者の自然ミイラというのは、その名のごとく自然に死体がミイラとなったもので、代表的なものは中国のタクラマカン砂漠で発見されたものです。

そのでき方は、砂漠に穴を掘り、死体を埋葬した後、<sup>B</sup>キウウゲキ<sup>A</sup>な気温の上昇により、死体の中にある血液を含む水分が一気に噴出し、その後も高温少湿の環境のもとで死体が腐ることなくミイラ化するというものでした。最近話題となった北ヨーロッパの水の中から見つかった古い死体や、アルプスの氷河の中から見つかった死体は、正確に言うるとミイラではなく、「屍ろう」というものです。

一方、人工ミイラというのは、エジプトを代表として、インカとか東南アジア、チベットなどのものをいいます。これらは意図的にミイラにするもので、技術的に死体から何らかの方法で水分をぬくことで体を後世に残すというものです。

人間の体は死ぬことで免疫力がなくなり、肉体の中に潜んでいる細菌やバクテリアなどが一気に増殖します。そのときのえさとして肉や水

を使うため人間の体が腐るわけですから、まず細菌やバクテリアが活動できないようにしてやれば死体は長くもつのです。それにはまず塩などで殺菌し、体の中から水分をぬき、乾燥化し、防腐剤をほどこすことで解決します。実際エジプトではそのようにして、三〇〇〇年間、ぼうだいな数の死体をミイラとして残し、墓に入れたのです。

その全部が全部現在まで残っていないのは、この五〇〇〇年間に心ない盗人が墓に侵入して、ミイラやいっしょに納められている財宝を盗んだからなのです。それにしても、古代、現代を問わず人間の品性の低さにうんざりするというのは、盗掘された後の墓を掘ったときの感想です。

さて、<sup>②</sup>なぜそんなにまでして古代エジプト人は人間をミイラにしたのでしょうか。それは、ひとつに人間の永遠性を人生のテーマとしていたからです。人間だれしも、永遠に生きていられたらどんなにいいかと思えます。

**A**、一部の不老不死思想の妄想をいだいた中国の皇帝以外はそうは考えず、死を受け入れてきました。その中でも古代エジプト人はいったん死を受け入れるのですが、その後で生き返られたらどんなにかいいだろうと考えました。そのため<sup>③</sup>のいろいろなくみを考えたのです。

まず、人間は死ぬと肉体と精神の二つに分かれると考えました。肉体は永久保存できるミイラの形を技術上確立し、精神はこの世に残って肉体を守るカー（精霊）とあの世に行くバー（魂）とにさらに分けました。すなわちこの世を人間の住む世界、あの世を神々の住む世界として、相互を神も人間も行き来できるものにしたのです。いまでいうサイバー<sup>\*1</sup>世界を、古代エジプト人はいまから五〇〇〇年以上も前につくりだしていたことになります。

この間のキーワードは、魂であり、循環であり、三位一体（<sup>さんみいつたい</sup>肉体と精霊と魂はもともとひとつであったのだから、いつでも一体化できるという意味）です。この思想を実現するためには、唯一現実であるこの世に残された肉体を永久保存しなければならぬという使命が、古代エジプト人をしてミイラ製作に向かわせた理由でした。

ミイラ製作がはじまったのは、<sup>\*2</sup>第四王朝期でした。ミイラになることは永遠の命をもつ、すなわち神と同じになることを意味します。最初は、王だけが神と同じ資格をもつと考えられ、<sup>④</sup>ミイラになれたのは王だけでした。

やがて王は、自分の一族や功勞<sup>D</sup>のあつた高官たちにミイラになれる特権を与えて、その忠誠にむくいるようになります。死後ミイラになることは、神と同じ永遠性を保証されるわけです。**B**、王から与えられるこの恩恵は、もつともありがたいほうびのひとつでした。

<sup>\*3</sup>古王国時代末期から中王国時代になると、恩恵を与えられる者の数はますますふえていきました。王は、ミイラになる者に対して、棺や寝台、内臓を入れる壺、石碑を贈ります。しだいに、富裕者階級全体がミイラ製作をおこなうようになっていきます。そして<sup>\*5</sup>新王国時代には、農民や官吏、商人などだれもが死後の永遠の命を願うようになりました。

こうして古代エジプトでは、およそ五億体のミイラがつくられたと推定されています。

ところで、最初のころ、王だけが神と同じ資格をもつと考えられたのは、なぜなのでしょう。それは、紀元前三〇〇〇年ごろ、エジプトをはじめて統一したナルメル王にはじまっているのです。

紀元前三〇〇〇年の少し前、エジプト各地の小さな村や町は統一され、上・下エジプトという二つのグループに分かれていました。そして、この二つのグループを統一したのがナルメル王でした。

ナルメル王は、上・下エジプトを統一するときに、エジプトのオシリス神話に登場するホルス神と自らを同一視することで自分の神性をしめしました。オシリス神話とはつぎのような物語です。

古代エジプトがつくられるとき、混沌こんとんの中から生まれた原初の神は、まず大地の神ゲブと天界の女神ヌトを生みだしました。ゲブとヌトの長男オシリスは、地上の神となって人間に農耕や技術を教えました。ところが、弟のセト（砂漠の神）は兄のような才能をもたなかったために、兄オシリスをねたみ、だまして殺します。そして、死体をバラバラにして、ナイル川に捨ててしまいました。

オシリスの妹で、また妻でもあったイシスは、悲しんで夫の死体をひろい集め、ぬいあわせて生き返らせることに成功します。生き返ったことで、オシリスは冥界の王となりました。そして、オシリスとイシスのあいだに生まれたホルス（鷹たかの神）は、成人すると父の敵・セトへの復讐ふくしゅうの旅をつづけ、ついにセトをうちとります。その後、ホルスは父のあとをついで地上の王となり、エジプトの歴史がはじまりました。

この物語には、ヘリオポリスの神のサイバンE所でホルスの正統性がみとめられるという話がつづいており、ナルメル王は自分をホルス神の化身とみなすことで、エジプトの始祖である現人神あらひとがみとなったのです。こうして、古代エジプトの王は、ナルメル王の後もずっと神の化身として存在することになったのです。

吉村作治よしむらさくじ『ピラミッドの謎』より

※1 サイバー世界 … コンピュータ・ネットワーク上の仮想空間。

※2 第四王朝 … 紀元前二六一三年～二四九四年ごろ。古王国時代（紀元前二六八六年～二一六〇年ごろ）に属する。

※3 古王国時代 … ※2を参照。

※4 中王国時代 … 紀元前二〇五五年～一六五〇年ごろ。

※5 新王国時代 … 紀元前一五五〇年～一〇六九年ごろ。

問一 二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなを「ひらがな」でつけなさい。

問二 空欄部 A・B に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。





ア 古代エジプトにおいてぼうだいな数のミイラが作られたのは、エジプト全体が豊かになり富裕者階級に属する人の数が増えたからである。

イ 意図的につくりだされ丁寧に扱われた人工ミイラとは異なって、偶然ミイラ化したに過ぎない自然ミイラを発見することは非常に難しい。

ウ オシリス神話において、ホルス神が地上の王として地位の正統性を認められたのは、父オシリスがこの世とあの世双方の王であったからである。

エ 古代エジプト人の信仰において、魂はあの世とこの世を循環する存在であるが、そのことと人間の永遠性は深く関係していると考えられていた。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(これまでのあらすじ) 小学五年生の少年は、生まれて初めて一人でバスに乗った。緊張した少年は、運賃と整理券を握りしめ、目的地の大病院前で降りようと、バスがまだ走っているうちに運賃箱のそばまでやって来た。すると、まだ若い運転手に「停まってから歩かない」と注意されてしまった。

① 数日後、父からバスの回数券をもらった。「十回分で十一回乗れるから、こっちのほうが得なんだ」——十一枚つづりが、二冊。

「だいじょうぶだよ」父はコンビニエンスストアの弁当をレンジに入れながら、少年に笑いかけた。「これを全部使うことはないから」

「ほんと?」

「ああ……まあ、たぶん、だけど」

足し算と割り算をして、カレンダーを思い浮かべた。再来週のうちに使いきる計算になる。

「ほんとに、ほんと?」

低学年の子みたいにしつこく念を押した。父は怒らず、かえって少し申し訳なさそうに「だから、たぶん、だけどな」と言った。

電子レンジが、チン、と音をたてた。

「よし、ごはんだ、ごはん。食べるぞっ」

父は最近おしゃべりになった。なにをするにもいちいち声をかけてくるし、ひとりごとや鼻歌も増えた。

お父さんも寂しいんだ、と少年は思う。

回数券の一冊目を使いきる頃には、バスにもだいぶ慣れてきた。

「毎日行かなくてもいいんだぞ」

父に言われた。「宿題もあるし、友だちとも全然遊んでないだろ？ 忙しいときや友だちと遊ぶヤクソクしたときには、無理して行かなくてもいいんだからな」——それは病室で少年を迎える母からの伝言でもあった。

母は自分の病気より、少年のこのほうをずっと心配していた。自転車でお見舞いに行きたくても、交通事故が怖いからだめだと言われた。バスで通っていても、病室をひきあげるときには必ず「降りたあと、すぐに道路を渡っちゃだめよ」と③のだ。

④少年が笑って応えようと、父は少し困ったように「まだ先は長いぞ」とつぶけた。「昼に先生から聞いたんだけど……お母さん、もうちょっとかかろうかって」

「……もうちょっと、つて？」

「もうちょっととは、もうちょっとだよ」

「来月ぐらい？」

「それは……もうちょっと、かな」

「だから、いつ？」

父は少年から目をそらし、「医者じゃないんだから、わからないよ」と言った。

二冊目の回数券が終わった。使いはじめるとあっけない。一往復で二枚ずつ——一週間足らずで終わってしまう。

まだ母が退院できそうな様子はない。

「回数券はバスの中でも買えるんだろ。お金渡すから、自分で買うか？」

「……一冊でいい？」

ほんとうは訊きたくない質問だった。父も答えづらそうに少し間をおいて、「面倒だから二冊ぐらい買っとくか」と妙におどけた口調で言った。

「定期券にしなくていい？」

「なんだ、おまえ、そんなのも知ってるのか」

「そっちのほうが回数券より安いんでしょ？」

定期券は一カ月、三カ月、六カ月の三種類ある。父がどれを選ぶのか、知りたくて、知りたくなくて、「定期って長いほうが得なんだよね」と言った。

「ほんと、よく知ってるんだなあ」父はまたおどけて笑い、「まあ、五年生なんだもんな」とうなずいた。

「……何カ月のにする？」

「お金のことはアレだけど……回数券、買っとけ」

父はそう答えたあと、「やっぱり三冊ぐらい買っとくか」と付け加えた。

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそつと覗き込んだ。あのひとだ、とわかると、胸がすぼまった。

初めてバスに一人で乗った日に叱られた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使いはじめたばかりの頃、整理券を指にマきつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。叱る口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスツとしているように見える。

嫌だなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかない。『大病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と顔をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの？」

「……はい」

「いくらなのやつ？」

「……百二十円の」

河野さんは「だから、そういうのも先に言わないと、後ろつかえてるだろ」とぶつきらぼうに言って、一冊差し出した。「千二百円と、今日のぶん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊もっ」

「はい……すみません……」



大きくため息をついた河野さんは、「ちょっと、後ろのお客さん先にするから」と少年に脇わきにどくよう顎あごを振った。

少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互に呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴えた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンかばんを探り、追加の二冊を少年に差し出した。

代金を運賃箱に入れると、「かよってるの?」と、さつきよりさらにぶつきらぼうに訊かれた。「病院、かようんだったら、定期のほうが安いぞ」

⑥ わかっている、そんなの、言われなくたって。

「……お見舞い、だから」

かほEそい声で応え、そのまま、二||げるようにステップ④を下りて外に出た。全然とんちんかんな答え方をしていたことに気づいたのは、バスが走り去||ってから、だった。

重松清しげまつきよし『バスに乗って』より

問一 二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなを「ひらがな」でつけなさい。

問二 波線部⑦～⑩のうち、品詞の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部①「数日後、父からバスの回数券をもらった」とあるが、少年が母の入院する病院へ通うのにバスを使っている理由を、六十字以内で答えなさい（句読点を含む）。

問四 傍線部②「無理して行かなくてもいいんだからな」とあるが、父がこのように言うのはなぜだと考えられるか。「～から。」に続くように本文中から十六字で抜き出しなさい（句読点を含む）。

問五 空欄部③に入る語句として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 駄目を出される

イ くぎを刺される

ウ 揚げ足を取られる

エ 気を遣われる

問六 傍線部④「妙におどけた口調で言った」とあるが、このときの父の様子の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 少年に訊きたくない質問をさせてしまったことを後悔しながらも、起こってしまったことは仕方がないと、開き直っている。
- イ 少年の心配をはつきりと打ち消すことができないことをもどかしく思い、そうした自分自身をあざ笑うような態度をとっている。
- ウ 少年の心配は十分理解しているつもりではあるが、大人になるためには必要なことだと考えて、励ますような態度をとっている。
- エ 少年に好ましい返事ができないことを残念に思いながらも、その様子を少年には見せまいと、努めて明るく振る舞っている。

問七 傍線部⑤「あのひとだ、とわかると、胸がすぼまった」とあるが、この時の少年の様子の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 初めてバスに一人で乗った日に叱られて以来、そのひとのバスに乗るのが怖くなった運転手が運転していることがわかり、しり込みしている。
- イ バスを降りるときに回数券を買わなくてはならないので、運転手のムスツとした顔つきを見て、いまから緊張せずにはいられないでいる。
- ウ 何度か注意されたことのある怖いひとが運転手だということがわかり、そのひとから回数券を買わなくてはならないことに気後れしている。
- エ 前に何度か叱られた運転手が運転席にることがわかり、言われたことを思い出して今回は失敗しないようにしようと気を引き締めている。

問八 傍線部⑥「わかっていて、そんなの、言われなくたって」とあるが、この時の少年の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 定期券の方が安いのは知っているが、期間によっては回数券の方が得なのだから、事情を知らないひとに何も言われたくないと思腹立たしく思う気持ち。
- イ 病院に通っているのは自分のためではなく、病気の母のお見舞いのためなのだから損得で考えるのはおかしいと、運転手に怒りをぶつけたい気持ち。

ウ 父が回数券を買えといっているのでやむなく買っているだけで、本当は定期券を買いたいのだという本音を見抜かれたように思い、うろたえる気持ち。

エ 母のお見舞いは定期券を買わなければならないほど長くは続かないはずだからあえて回数券を買っているのだと、運転手の提案に反発する気持ち。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

※1 みだうにふたどの 御堂入道殿、法成寺を作らせたまふ時、毎日渡らせたまふ。そのころ、白犬を愛して、飼はせたまひける。御供にまゐりけり。

① 白犬が御堂入道殿のお供として

ある日、門をいらせおはしますに、御先に進みて、走りめぐりて、ほえければ、立ち止まらせたまひて、御覧するに、させることなかりければ、なほ歩みいらせたまふに、犬、御直衣の欄をくひて、引きとどめ奉りければ、「いかにもやうあるべし」と、榻を召して、お尻をかけ

※2 しじ なるかわけがあるのだらう

て居たまひて、たちまちに晴明を召して、子細を仰せらるるに、しばらく眠りて、思惟したる気色にて申すやう、「君を呪詛し奉るもの、厭

※3 せいめい 事情をお話しなさると、

目を閉じて、考え事をしている様子で

呪い申し上げる人が、

術の物を道に埋みて、越えさせ奉らむと、かまへ侍るなり。御運、やむごとなくして、この犬、ほえあらはすところなり。

※4 えん たいへんよくて

り小神通のものなり」とて、そのところをさして、掘らするに、土器をうち合せて、黄なる紙ひねりにて、十文字にからげたるを、掘りおこ

※5 かはらけ 十字にまきつけてしばつてあるものを、

して、解きて見るに、入りたるものはなくして、朱砂にて、一文字を土器に書けり。

赤い顔料で

『十訓抄』より

- ※1 御堂入道殿 … 藤原道長。
- ※2 榻 … 牛車に乗り降りするときに使う踏み台。腰をかける時にも使用した。
- ※3 晴明 … 安倍晴明<sup>あべのせいめい</sup>。呪術や式神を使って、悪霊退治や町の護衛などを行う陰陽師<sup>おんみょうじ</sup>。
- ※4 厭術の物 … 呪いの物。
- ※5 土器 … 素焼きの器。

問一 傍線部①「まゐりけり」を現代仮名遣いに改めて、すべて「ひらがな」で書きなさい。

問二 波線部A「立ち止まらせたまひて」、B「かまへ侍るなり」の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 御堂入道殿
- イ 白犬
- ウ 晴明
- エ 君を呪詛し奉るもの

問三 傍線部②「いかにもやうあるべし」とあるが、御堂入道殿がこのように考えた理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 少しでも立ち止まろうとすると、白犬が先に進みたい様子でほえながら着物のすそを引っぱってきたから。
- イ 一緒に走っていた白犬が、なにもない所で急に立ち止まったり歩き出したりをくり返したから。
- ウ 走り回っていた白犬が突然ほえだして、着物の上からおしりにかみついてきてしまったから。
- エ 白犬がなにかを見つけたように着物のすそにかみついて、先に進ませないようにしていたから。

問四 空欄部  に当てはまるものは何か、本文中から一字で抜き出しなさい。

問五 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 白犬のおかしな行動は、御堂入道殿にのろいをかけようとした人物にあやつられていたものだった。
- イ 御堂入道殿は運がよかったので、晴明が来る前に自分がのろわれていることに気付くことができた。
- ウ 御堂入道殿に信頼されて呼び出された晴明は、白犬がのろいに気付いていたであろうと指摘した。
- エ 道に埋められていた物は、御堂入道殿にのろいをかけるもので、中には黄色い紙が入っていた。